

釜本
邦茂



阿久根
賢一



棒サッカーに参加して、 皆さんがいい表情しているのが印象的でした (釜本)

阿久根 釜本さんとのご縁は、桂春團治師匠にご紹介いただいたことがきっかけでした。1968年のメキシコ五輪で得点王になられ、銅メダル獲得に大いに貢献された釜本さんが、日本サッカー界のレジェンドであることは、皆さんご存知の通りです。釜本さんには我々が生涯ユニバーサルスポーツとして競技化した、棒サッカー協会理事を務めていただいています。今日は、よろしくお願いします。

釜本 こちらこそ、よろしくお願いします。ところで棒サッカーは、そもそも豊泉家さんが考案されたものなんですか。

阿久根 元々は、一部の高齢者施設でレクリエーションとして行われていたのですが、ルールを明確にするなどして、競技にしたのが我々なんです。基本的に1チーム11人が棒を持って横並びに座り、自チームのゴールを目指してボールを打ち合って得点を競うものです。イスから立ち上がってはいけない、棒を高く振り上げてはいけないなど、反則も明文化しました。認知症をお持ちの方も、要介護の高齢者の方も安心かつ、安全にご参加いただけるスポーツです。釜本さんは棒サッカーの存在を初めてお知りになった際は、どう思われましたか。



釜本 名前だけを聞いて最初は一体、なにをするのかと思いましたよ (笑)。だけど現場で高齢者の方が楽しそうにされているのを見て、なるほどなと思いました。あ、でも僕が高齢者と言うのは、良くないかもしれませんね。僕も75歳を過ぎて、高齢者ですから (笑)。棒サッカーはひとつの競技であり、勝ち抜いて優勝を目指すとなると、全員熱が入りますね。一生懸命にやっておられる姿を見ると、“いくつになってもスポーツはいいものだ”と思わされます。

阿久根 高齢者の方たちも勝ち負けが懸かると、知らず知らずのうちに、闘争本能が出るんですね。

釜本 サッカーにも野球の名球会のように、名蹴会というのがあるんです。その企画で、40歳から60歳くらいまでの人たち50人くらい集まってもらい、杉山 (隆一氏、メキシコ五輪日本代表) 組と釜本組にチームを分けて、サッカーをやったんです。ものすごい数の申し込みがありましたよ。会場はワールドカップの試合もやった埼玉スタジアム2002で、プレーする人たちは「そこまで必死にならなくても、エエやないか」というほど一生懸命だったんです。参加者に聞くと「我々は勝ちたいんです。」と。やはりいくつになっても、人間には勝ち負けにこだわる精神がありますね。そういう意味では棒サッカーも、お年寄りの方たちにとって、いい刺激になるんじゃないですかね。

阿久根 勝ちを求めるのは、人間の本能的なものかもしれません。生きてきたなかで、植えつけられているんでしょうね。

釜本 一番になりたいというのは、人間が持っている本能だと思いますよ。一番になろうと一生懸命にやって、2番になったのなら仕方がない。だけど最初から2番でもいいやと思ってやってたら、2番にもなれませんよね。

阿久根 棒サッカーをされている高齢者の方も実際にやるまでは、あまり乗り気ではないんです。だけど常日頃「もう、いつ死んでもいい」とか、「楽しいことが、なにもない」とぼやいている人が、棒を握ってイスに座った瞬間に目の色が変わるんです。本当に皆さん、熱くなられますね。決勝戦になるとさらに熱くなって、高齢者の方がハハハと息を上げながらプレーされていますよ (笑)。

釜本 僕も毎年、大会に行かせてもらっていますから、その様子はよくわかります。あそこに座ったら、勝負事ですから。だけど試合が終わったあとは、勝ち負け関係なく、みなさんいい表情しているのが印象的です。

阿久根 やり切った感と、勝ったチームは来年も、負けたチームは来年こそは勝つぞと、そういう感情が沸き起こってくるんでしょうね。これはスポーツが持つ、すごい効果だと思います。

釜本 僕はオープン参加の人たちに混ざって参加させてもらっています。一緒にやらせていただくとね、ワイワイ言いながら、時に僕が注意されることもあります。皆さん楽しそうにやっていますよ。僕らはオープン参加だから勝ったり負けたりは関係ないんだけど、やっぱり勝ちたい。だから、こっそり反則みたいなことをしてみたり (笑)。

阿久根 釜本さんは時々、相手の棒を抑える反則をされていますから (笑)。

釜本 サッカーでいうと、審判が見ていないところで、相手のシャツを引っ張るようなもんだね (笑)。

